学校は誰のために

県立松尾高等学校長　佐藤（さとう）　晴光（はるみつ）

１　はじめに

県立松尾高等学校は、今年創立110周年を迎えた、県下有数の伝統校である。長きに渡り、地域と共に歩み、支えられ、特に女子教育に尽力してきたが、平成18年度から男女共学となり、同時に福祉コースが県によって設置された。

今、本校を含む外房地域は少子高齢化の波が押し寄せているが、こうした難しい時代でも、「安心して子供を通わせることのできる学校」として、地域の方々から高い評価を受け続けている。

２　学校を創る

学校を創るのは誰か。校長？答えはＮＯ。もちろん、教頭でも個々の教員でもなければ、生徒でもない。では誰か。

皆さんは、「教育課程とは何」と聞かれて、どう答えるだろうか。新しい高等学校学習指導要領解説総則編に、次のような一文がある。「学校において編成する教育課程については、学校教育の目的や目標を達成するために、教育の内容を生徒の心身の発達に応じ、授業時数との関連において総合的に組織した各学校の教育計画である」と。私が思うに、教育課程を編成するとは、「今、求められていることは何か」を学校（ここで言う学校には、生徒、保護者、教職員すべてを含む。）と地域が一体となって考え、形にすることである。こうして作られた教育計画が滞りなく実施される場が学校であるとするならば、学校を創るのは、学校という組織を含む地域社会である。校長をはじめとする学校スタッフは、ＰＤＣＡサイクルの下、改善を進める。当然、途中様々な意見が出た時に衝突もする。これらを最終的に調整し、まとめ上げる力が管理職の力量と言える。したがって、学校を創る上で、校長のリーダーシップと教頭の調整能力は車のハンドルと車輪のようなもので、これ無しには走り出せないのである。

３　クロスカリキュラム

10年近く前のことになるが、市立千葉高校の教頭時に、校長のリーダーシップの下、第２期ＳＳＨ（スーパーサイエンスハイスクール）の指定をミッションに掲げた。この時の研究計画の目玉の一つとして、次に示す「クロスカリキュラム」（**図１**）という概念を提案した。

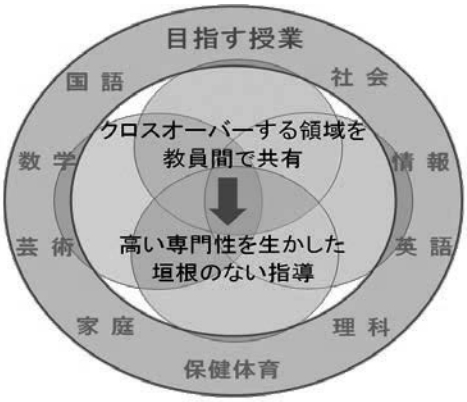


図１クロスカリキュラムの考え方

この教科の壁を超えた授業スタイルは、当初は多くの職員に反対されたが、できる範囲からやってみると、意外にうまくいった。

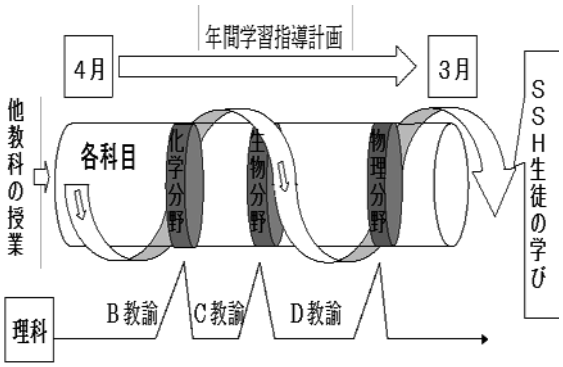


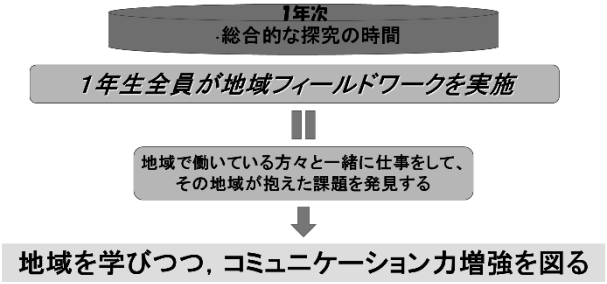
図２　教科を超えた教員の関わり方（例）

何よりも他教科で何をどう教えているのかが分かるようになり、教員同士気軽に「頼む・頼まれる」の関係も築けるようになった。生徒の評判も決して悪くはなかった。当時の先生方の頑張りが、新学習指導要領の教科横断型の展開や探究活動の基礎となっている。

４　松尾高校におけるＳＧＨ

山武地域は少子高齢化が進む一方で、外国人労働者が増えるなど喫緊の課題を抱えている。そこで、松尾高校を元気にして、松尾地域、さらには山武地域全体を活性化しようという、地域からの働きかけによって、スーパーグローバルハイスクール（ＳＧＨ）の活動が始まった。研究テーマは「地域から考えるグローバルエイジング研究」である。地球規模で進む高齢化を、自分の住む地域と比較しながら、その解決方法を生徒独自の視点で研究し、アクションプランにして国の内外に発信している。

基本的に１年生全員が「地域フィールドワーク」（地域でインターンシップをしながらそこで働く人々と対話をして、何が課題なのかを発見する活動）を行うことから始まる。中には海外研修で課題意識を深める生徒もいる。生徒の研究内容は、市長をはじめ山武市の幹部の方々にも披露される。実現可能なプランは市や関係機関と連携して事業化され、こうした経験が、生徒の自己肯定感を向上させる。



また、山武市の全面協力で、夏と冬に英語通学合宿を３日間開催し、生徒は英語漬けの日々を送る。この経験が英語のみならず「ヒト」と話すことへの抵抗を無くす一助となる。まさに、地域と一体となった生きた教育活動が行われているといっても過言ではない。

英語合宿「スタディランチ」の様子

５　おわりに

学校は誰のためにあるのか。もちろん生徒のためにある。しかし、既にお分かりのように地域のためにもある。そして忘れてはならないのは、先生方のためにもある。学校がなくなれば、生徒、保護者、地域の方、そしてそこで働く先生方はどうなってしまうのか。

唐突だが敢えて若い先生方に問う。今、働き方改革が様々な場所で進められているが、なぜ改革が必要なのか。ＳＳＨやＳＧＨなどの指定を受けることは働き方改革に逆行する、などと意見する教員がいたとき、あなたが管理職だったら何と答えるか。

今求められているものを把握し、学校は誰のためにあるのかをきちんと理解できる、そんな教職員集団が当たり前のように存在する時代となることを、祈るばかりである。

ご存じですか？院内学級
～国府台病院児童精神科と共に～

市川市立第一中学校院内学級教頭　青木（あおき）　良斗（よしと）

１　はじめに

平成30年４月に市川市立第一中学校院内学級教頭として赴任し２年目になった。通常の学級の担任や生徒指導、学年主任、教務主任などの経験はあったが、初めての特別支援学級である。通常の学級とのシステムの違いにとまどいながら、手探りで教頭職を務めてきた。今では多くのニーズに応えられる学級として誇りに思っている。そんな院内学級を紹介する。

本校の院内学級は昭和40年から国立国際医療研究センター国府台病院の敷地内に校舎を構え、児童精神科の入院者を対象に「普通学級に復帰させる」という方針で設置されてから54年が経過している。伝統のある情緒特別支援学級である。全国には通常学校の分校として存在する院内学級は10校ほどある。

２　児童精神科と院内学級

国府台病院児童精神科には、45床のベッドがあり、病室はいつもほぼ満室に近い状況である。年度途中でも市川市内に限らず、近隣市や東京都から多くの生徒が転入し、治療しながら学習している。

生徒の中には不登校、親からの虐待、親への暴力、痩せ過ぎ、ネグレクト、自虐行為、場面緘黙などを経験している者もいる。

生徒の特徴は

⑴自我が強く、相手の意見に共感するのが苦手。（空気が読めない）

⑵自己肯定感が低かったり、嫉妬心が強かったりして気分を損ねやすい。

⑶周囲の目を気にしすぎたり、状況変化に過敏すぎたりするため、必要以上に劣等感を持ち、集団に溶け込みにくい。
（教室に入れないなど）

⑷学習に取り組もうとすると、腹痛、頭痛、嘔吐などの身体症状を伴う。

⑸太らないように食事を制限しているので、小柄で細身になってしまう（女子）。

などがある。最近の傾向は不登校と拒食症が目立つようになっている。

児童精神科には、10人の医師と20人の看護師、２人の心理士、２人のソーシャルワーカーがスタッフとして関わっている。いろいろな症状の生徒がいるため「体育の授業に出られるのか」、「院内学級まで大人の引率が必要な生徒なのか」など主治医との確認が必要である。毎週火曜、金曜に生徒が今どんな状態なのか、朝のカンファレンスで病院スタッフと学校職員で確認している。

小学生は近隣の市川市立国府台小学校に在籍して、同じ校舎の中で、中学生と一緒に過ごしている。

あくまでも病棟は「生活の場」で分校は「学校」である。病棟と分校はわずか50ｍの距離だが、学習の苦手な生徒にとっては遠く感じている。

他の特別支援学級と違い、入院してくる生徒が対象になっている。３月に中学３年生が卒業すると、空いたベッドに、学年末を待たずに、１年生や２年生が入ってくる。更に１学期は、入院を待っていた生徒も続々と転入してくるため、メンバーがどんどん変わる。

人間関係を築くことが苦手な生徒が多い上に、友達関係が急激に変わるため、担任は生徒一人一人の状態を把握するのが大変である。入院を待っている生徒は３年生が多く、３学期までに３年生が25人くらいになる。

３　院内学級の教育課程

院内学級の指導法として「集団活動療法」がある。児童精神科スタッフと小学生も一緒に集団活動を行い治療に役立てている。①柴又まで江戸川散策、②病棟前で行う飯盒炊飯、③鋸山登山、④高尾山キャンプ、⑤トリムバレーボール大会（ソフトバレー）、⑥鎌倉遠足などを行っている。

登山やキャンプでは体力や精神面で途中リタイヤしてもよいようにスタッフの配置を考えている。本年度は生徒31名に対して教員９名、病院スタッフ19名の計28名で行った。生徒には、不登校経験者が多く、体力があまりない生徒もいるので、登山コースの長さを３段階に分け、頑張れるところまで登山させている。終わった後の充実感を実感できるよう皆で励ましている。そうすることで仲間や大人との信頼関係が深まっている。

４　教頭として

分校には、一昨年まで管理職の配置がなかったため、小、中学校の担任が業務を分担していた。昨年度から管理職として①備品や施設の管理、②転入転出の手続き、③３年生の進路の問合せ、④本校や国府台病院児童精神科との連絡調整等を私が行っている。また、トラブルへの対応や進路についての確認を円滑に行えるよう、自分の仕事の整理を進めている。だんだん保護者と向き合う時間を確保できるようになり、信頼関係を築くことができていると感じている。

５　理科の教員として

現在、私は院内学級の教頭であるが、１～３年生の理科を担当している。ここではできるだけ個別指導の時間を増やしている。１、２年生は人数が少ないこともあり、生徒一人一人の意見を聞いたり、実験を通して興味を持たせたり、ささいな反応を感じたりしながら授業を行うことができている。授業時間もまた、私にとって充実した時間となっている。

実験は主に本校で行うため、生徒は「本校の生徒に会いたくない」「10分歩きたくない」などの思いを持っている。勇気を出して本校に来た生徒を励ますとともに丁寧な指導を心掛けている。

６　おわりに

最初は不安で教室にも入れなかった生徒が教室に入り、皆で授業を受けて発表できるようになっている。自分のイライラする気持ちを抑えられないでパニックになる生徒も、困ったことを大人に相談できるようになっている。生徒の成長にふれられる喜びを感じる。また、病院スタッフと過ごしていることは、今後の教員生活に生かせるよい経験だと感じている。

これからも教頭として、学級担任が生徒と全力で向き合えるように支えていこうと思う。私一人でできることではないので、校長や国府台病院のスタッフと協力し、出身校への復帰や主体的な進路決定ができるように職務を進めていきたいと考えている。

主幹教諭として、教務主任として

船橋市立小室小学校主幹教諭　山岸（やまぎし）　塁（るい）

１　はじめに

本校は、船橋市の北端に位置しており、全校児童約270名、12学級（内１学級は特別支援学級）の小規模校である。

本校へは平成27年度に赴任し、教務主任兼学級担任として勤務しており、今年度より主幹教諭へ登用となった。

学級担任をしながら教務主任、主幹教諭となったことを利点と考え、校長の指導の下、以下のように学校運営に関わっている。

２　担任目線の行事運営

教務主任は、学校行事の企画をすることが多い。日程調整や日課時刻表の調整などは行事がスムーズに運営されるかに大きく関わる。提案の際には、学級担任であることを生かして、自分の学級の子供たちを念頭に置き、実際に教員や子供たちの動きに無理はないかを考慮している。また、提案の前に、教員だけでなく事務職員にも意見を聞き、学校全体が一丸となって行事の運営に関わることができるよう配慮している。

３　若年層教員の育成

本校も、ご多分に漏れず若年層教員が多く、担任12名中９名が20、30歳代である。学級経営や教科指導、校務分掌の遂行など指導しなければならないことは多い。一人一人に全てを伝えていくには時間がいくらあっても足りない。そこで、私が積極的に仕事の仕方を見せることで、研修時間を取らずにOJTとして若年層教員の指導ができると考えた。

具体的には、①立場に関係なく行事の準備や片付けには一番先に駆け付けるようにする。②子供たちと毎日外遊びを行って児童理解に努める。③若年層教員の学級が感染症等で学級閉鎖となった際には、一日を通して自分の学級へ呼び、学習時間のみならず休み時間や給食時間などで学級経営をいかにして行っているかを見学させる。④職員会議の提案では、前年度の反省を確実に生かしてPDCAサイクルを確立させる等である。

また、自分の学級に専科指導が入っている時間に若年層教員の授業を見に行き、学習指導に関する指導・助言も行うようにしている。

４　風通しのよい職場づくり

私も学級経営をしている中で、当然、迷い、悩むことがある。その際は積極的に他の教員に相談している。どの立場、どの年齢でも、業務に行き詰まることがあることを示し、自分一人で思いを抱えずに、職員室内で様々な悩みや意見を言いやすい雰囲気を作っていきたいと考えている。小規模の本校では、学年を超えた情報交換が積極的に行われている。

５　終わりに

学級担任と教務主任を兼ねていることをメリットとして述べてきたが、当然デメリットもある。専任の教務主任に比べて、圧倒的に管理職を助ける時間が少ないことである。

今後は、少ない時間の中でいかに効率よく自分の学級づくりや若年層の育成を行い、主幹教諭として、より一層、校長の学校経営を支えられるよう、全力で職務に当たっていくつもりである。

初任者研修で学んだこと

匝瑳市立八日市場幼稚園教諭　渡邊（わたなべ）　美帆（みほ）

私は、子供の個性に寄り添いながら成長を支えられるような存在になりたいと考え、幼稚園教諭を志し、昨年度から本園に新規採用となった。

園外研修では、幼稚園教諭としての在り方や子供・保護者への接し方、実践的な指導方法を学び、「先生」として子供の前に立つ心構えを持つことができた。

園内研修では、講師から指導案を基に、園児の登園から降園までの保育の様子を見ていただき、その都度反省会・勉強会に参加した。そこで学んだことは忘れないようにＡ４サイズのノートに記録した。ノートは最後のページまで使い切り、１年間の研修をやり遂げたことを実感した。ノートに記録した言葉は、どれもかけがえのない財産となったが、その中でもとても心に残っている言葉がある。それは「教師にとって子供は大勢の中の一人。けれど、子供にとって教師は一人。」という言葉である。日々の保育の中で、はっとさせられる言葉であった。

私は今、一日の保育が終わった時にこの言葉とともに、今日は子供一人一人がどのような表情をしていたか、一人一人の子供とどのような会話を交わしたかを振り返ることが習慣となっている。これからも、この言葉を胸に、初任者研修での学びを活かしながら、子供一人一人に寄り添った保育ができるような教師を目指していきたい。

初任者研修を振り返って

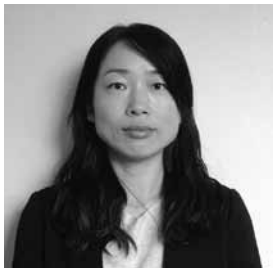
県立大原高等学校教諭　松川（まつかわ）　茜（あかね）

授業や生徒指導で困っているときに、私はふと、初任者研修で出会った先生方のことを思い出すことがある。初任者研修では、「今、困っていること」を発表し、聞き合い、協議する機会が多く設けられていた。そのような協議をしていく中で、私たち初任者の多くが、同じような時期に同じような課題を抱えているのだということを知った。授業でも生徒指導でも、試行錯誤を繰り返しては手応えがないことに不安や焦りが募る日々の中にあって、「みんなも同じように悩んでいるから頑張ろう」と思えたことはとても励みになった。きっと他の初任者も、同じような気持ちを経験したのではないかと思う。

初任者研修を振り返るにつけて、印象深い経験がもう一つある。それは、月に数回、受講者の立場になったことだ。勤務校では常に教師として「授業をする立場」だが、受講者になることは、「授業を受けている」立場の生徒の気持ちを考えたり、自分が生徒だった頃のことを思い出したりするきっかけになった。目の前の授業を行うことで手一杯だったときに、「生徒の気持ち」をもう一度体験し、考えることができた貴重な機会だったと感じている。

様々な経歴を持つ初任者の仲間と同じ悩みを共有できたことや、受講者の立場で感じたことを忘れることなく、そして視野を狭めずに日々を積み重ねていきたいと考えている。

学び合いを中心においた算数学習



山武市立成東小学校教諭　佐藤（さとう）　真寿美（ますみ）

１　はじめに

新学習指導要領が来年度より完全実施となる。普遍的な視点である「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められている。本校でも、「伝え合い」、「学び合い」を学習の中心におき、子供の思考力・判断力・表現力を育てる学習指導の在り方について算数科の研究に取り組んでいる。

２　授業実践の概要

本校の算数科の授業は「導入（課題把握）→見通し→自力解決→伝え合い→比較検討→適用→まとめ→振り返り」の基本構成を基に、各単元によってそれぞれの時間の軽重を考えて授業を行っている。以下、私が日頃の授業を構成する上で気を付けていること、実践していることをまとめた。

３　授業の実際

⑴導入（課題把握）

学習の導入では、二つのことに留意している。まず一つ目は、「子供が課題を理解しやすいかどうか」である。具体物やICT機器を使い、視覚的に課題を把握しやすくしたり、今までの学習との違いを明確にしたりしている。

ＩＣＴを使った導入

二つ目は、子供の「やりたい。」という気持ちを高めることである。子供にとって身近な素材や場面を取り上げ、「解いてみたい。」という気持ちをもたせることができる課題提示を心掛けている。

⑵見通し

課題を把握させた後は、課題について見通しをもたせる。そのために、吹き出しに課題に対しての考えを自由に書かせる。そして全体で「何を使ったら解けそうか。」「何が前時と違うのか。」ということを共有する。同様に「分からない。」ことも自由に書かせて発表させ、共有する。

最初は解き方について見通しをもつことのできない子供も、全体で確認することで「何が分からないのか。」が明確になってくる。そして、課題を整理し、次の自力解決につなげていく。

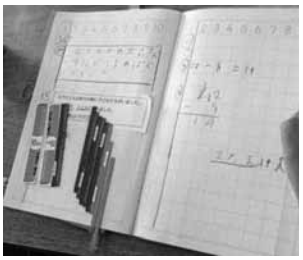
⑶自力解決

課題に対して自分なりの考えをもち、既習を生かして課題に取り組む時間は大切な時間である。しかし、すぐに課題を解決できてしまう子供もいれば、なかなか解答にたどりつかない子供もいる。この個人差をどう埋めていくかが難しい。そこで、自力解決の段階でも学び合いを取り入れている。一人で取り組むことが難しい子供を集め、具体物を操作しながら考えを出し合ったり、お互いに分か

らないことを確認し合ったりさせている。そこでヒントを得た子供は再び個別に課題に取り組むことができるようになっていく。

⑷伝え合い

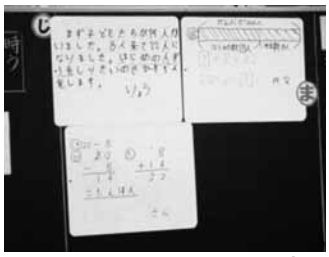
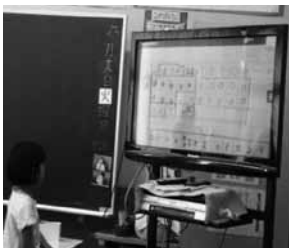
自力解決の後に自分の考えを伝え合う場を設定している。ペアやグループなど、その学習に合った形態で行っているが、どんな形態であっても、「自分の考えを相手に伝える」「友達の考えを最後まで聞く」ことを大切に指導している。子供たちは具体物を操作しながら自分の考えを伝えたり、図を基に説明したりしている。解答が途中であってもそこまでの説明を行い、何が分からなかったのかも共有し合っている。



具体物を使って伝え合い

⑸比較検討

子供の代表的な考えを全体で比較し、共通点や相違点を明らかにしていく。考えを発表する場面では、解答を書いた本人ではなく、伝え合いでその考えを聞いた友達が代わりに発表するようにしている。これにより、友達の考えを理解しているかの評価もでき、また、多くの子供の活躍の場を作る機会にもなっている。

友達の考えを発表

⑹適用

毎時間適用の時間を確保することは難しいが、最低１問は練習問題に取り組めるようにしている。新しい考えの有用性を、子供が感じることができるような問題を選ぶようにしている。

⑺まとめ

まとめを行う前に、必ず本時の学習問題について立ち返り、確認するようにしている。これにより、子供たちは今日の課題が何であったか、そして、何を新しく学んだのかを発見しやすくなっている。また、まとめの言葉はできる限り子供たちの言葉を使い、１時間の学習をまとめるようにしている。

⑻振り返り

本時の学習で「何が分かったのか」、「何が使えたのか」等を子供たちの言葉で振り返ることで学びを深め、日常生活に生かす視点をもったり、次の課題について考えたりすることができるようになっている。

４　他教科とのつながり

算数の学習で「伝え合い」、「学び合い」を取り入れることで本校の子供たちは他教科においても自分の考えを話したり、友達の考えを聞いたりする活動に抵抗なく取り組むことができるようになっている。

５　おわりに

この千葉教育への原稿執筆を通して、自分の授業を振り返った。日々自分が授業で心掛けていることをまとめただけであるが、日常の授業のねらいをしっかりと意識し、授業に取り組んでいく大切さを改めて感じた。本校に着任してから、算数の研究に関わる機会を多くいただいてきた。子供たちが学びを深め、主体的に学習に取り組む指導法について自分なりに考え、まとめる機会をいただいたことに感謝したい。そしてこれからも、目の前の子供の力を伸ばしていくことができるような授業実践に取り組んでいきたい。

実践的･体験的な学習を通した
技術科における確かな学力の習得を目指して

南房総市立嶺南中学校教頭　押元（おしもと）　和（かず）

１　はじめに

学校教育指導の指針の一つに「人生を拓く『確かな学力』を育む」がある。「生きる力」の育成のために、基礎的・基本的な知識及び技能の確実な習得と、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育成することが求められている。

現代社会は、多くの物が安価で入手できる。自らの手で物を製作する機会がほとんどないまま中学校へ入学してくる生徒が多い状況の中で、技術・家庭科の実践的・体験的な学習は重要な役割を担う。技術分野において、生徒の実態を踏まえた基礎的・基本的な知識及び技能の習得と、思考力、判断力、表現力等を育成する取組を紹介する。

２　知識・技能の効果的な定着に向けた「技能分析手法」を用いた「ジュエルボックス」の製作

⑴「技能分析手法」とは

「ものづくり立国」と呼ばれる日本の町工場でも、団塊の世代の大量退職により、優れた技術・技能を持つ人材育成において大きな課題が生じている。そこで考えられたのが、熟練労働者の技術・技能を伝授する手法「作業分析手法ＳＡＴ（Skill Analysis for Training)」である。「作業分析手法」は、作業時における指導者の行動を六つに分析し提示することで、効果的に技能の伝達が図れる手法である。以下に六つの指導内容を挙げる。

①作業の全体をつかませる
学習の目標や本作業の目的、進め方の全体像等を明確に示すことで、本学習の見通しを持たせる。

②作業環境を示す
道具や工具、材料、設備・環境、本作業に必要な基本的な技能を示すことで、作業の準備をしやすくする。

③作業工程を示す
作業工程をステップに分けて示すことで、作業の内容を分かりやすくする。

④各ステップのポイントを示す
指導者が目指している姿を的確に示し、場合によっては科学的な説明、体の使い方を示す。

⑤作業を総括的にまとめる
作業の開始から片付けまでの段取りや予想されるトラブルと対応の仕方を示す。

⑥学習者が自己評価できるようにする
判断基準や評価ポイントを示し、学習者が自己評価できるようにする。

⑵授業実践

題材として「ジュエルボックス」を用いた。本題材は、「けがき」「切断」「穴あけ」「検査」「接合」「仕上げ」の製作手順があり、様々な工具・道具を扱う必然がある。

上記③の作業工程を11に分類し、工程毎に「作業分析表」を作成した。知識・技能の定着が効果的に図れるよう、手工具の扱い方の科学的な説明や自己評価の観点に留意して作成した。作成したものは、各作業台の上に置き、一斉指導後も生徒が個々で確認できるようにした。

作業の様子

⑶成果と課題

①成果

教師は「作業分析表」を作成する過程において、指導のポイントや安全面での留意点などを事前に把握でき、効果的に指導することができた。また、生徒の事後の感想には、「『作業工程表』があったので失敗がほとんどなくできた。」「自分で『作業工程表』を確認しながら完成させることができて、すごく嬉しかった。」等、成就感・達成感が得られたことが分かるものが多かった。

②課題

実際に授業をしていく中で、作業工程上の様々な課題が発見された。その都度、「作業工程表」の修正・追加の必要があった。

３　思考力・判断力を育む「アルコールストーブ」「オリジナル五徳」の製作

⑴授業実践

知識及び技能の確実な習得とこれらを活用して課題を解決するための思考力、判断力、表現力等の育成に向け、以下のように単元を開発した。

⑵アルコールストーブの製作

最初に、基礎的・基本的な知識及び技能の習得として、アルミ缶を使用した「アルコールストーブ」を製作した。材料が入手しやすいため、失敗しても繰り返し製作することができ、特に基礎的な技能の定着を図れた。

⑶オリジナル五徳の製作

次に、思考力、判断力、表現力等の育成として、「オリジナル五徳」製作した。これは⑵で製作したアルコールストーブを活用し、更に「オリジナル五徳」へと発展させたものである。製作条件（①熱に強い材料　②炎の高さを８cm程度　③鍋を置く）を提示し、各自に材料の準備から設計まで思考させた。

製作した五徳

⑷成果と課題

①成果

生徒は、試行錯誤し、繰り返し製作ができるため、よりよく製作するために思考し判断する姿が見られた。また、アルコールストーブの実物を製作したことで、五徳の寸法や形状をイメージし、様々なデザインを考えることができた。「アルコールストーブ」「オリジナル五徳」という二つの題材を組み合わせることで、知識及び技能の定着が図られ、思考・判断・表現する場を設定することができ、指導のねらいをほぼ達成できたと言える。

②課題

習得した知識及び技能を使って、更に思考力、判断力、表現力等が深まるような段階的な指導を工夫していきたい。

４　おわりに

どの教科においても、地域や学校、生徒の実態に即した指導や他教科との連携などのカリキュラム・マネジメントが必須となっている。今後も、本教科の特性を生かし、生徒の実態に即した題材開発や指導法の工夫・改善を行っていきたい。

＜参考文献＞

森　和夫：『技術・技能伝承ハンドブック』ＪＩＰＭソリューション，2005